

# 漁港の 肉子ちゃん

あけましておめでとうございます。あっという間に3学期のはじまりです。今まで以上に体調に気をつけて、毎日すごしていきましょう。昨年11月号の『ユリイカ』が西加奈子さんの特集でした。ご本人が「死ぬときは、棺桶にこの号を入れてもらいたい。」と言うほど豪華な内容。インタビューや他の人から見た西さん像について書かれていて、首がもげるほど頷いたり、新しい発見があったりと充実の1冊でした。「この人と友達になりたい」（穂村弘）、「同時代に作品を読み続けることができ私は心底幸せです」（小林エリカ）、「でも、ちゃんとバイブルがあるから。西さんの小説という指針があるから、大丈夫。」（ふくだももこ）などなど...同じ気持ちになったことがあるなあ、そう思う人が他にもいるんだなあ、と思ってホクホクしました。西さんの人柄の良さについて言及している文章が多くありましたが、もちろん作品の素晴らしさについてもたくさん触れられていました。改めてなにか読みたくなり、今回選んだのは『漁港の肉子ちゃん』。なんと、2021年初夏にアニメで映画化されることが決定しました。明石家さんまプロデュース、『鬼滅の刃』ですっかりお馴染みになった花江夏樹さんも少年役として出演！このお話のすきなところは、登場人物のかわいらしさ。ほかの作品でもいろんなタイプの人が出てきますが、どの人もすこし変わっていたり、ものすごく気に入っていたり。個性が強い人ばかり出てくるのに、なぜか共感してしまうことも多々あって、本当に不思議です。肉子ちゃんは娘の喜久子をキクリん、と呼び、「心や酉に己、と書いて、心配と読むのやから！」「雨ヨ、と、書いて、雪と読むのやな！」などとちょっと変わった人なのですが、憎めない。自分のお母さんがそんなやつたらどうしょ、と思うけど、絶対的にまわりの人に好かれてる。自分は自分、ということがこんなに定着している人っているのでしょうか。肉子ちゃんは誰かにおもねったり、媚びたりはしません。それってめっちゃカッコいい。お話は娘のキクリんの目線で進むのですが、キクリんはかわいい普通の女の子なので、肉子ちゃんのようにあるがまま、とはいきません。まわりの空気を感じ取ったり、友達間のいざごに頭を悩ませたり。家に帰れば肉子ちゃんが「すごい.....すごい.....。」と寝息を立てているし、なかなか苦労人な女の子です。終盤、焼肉屋の主人・サッサンがキクリんに伝えた言葉がすごく響きました。初めて読んだときは通り過ぎた言葉が、いま読むと味わい深い。西さんの小説の通奏低音には必ず愛があって、どんなに突拍子もない人が出てきても、いつ読んでも、救われたり、気持ちが少し楽になったりします。直木賞受賞後のスピーチで、プロレスの棚橋選手のおマージュとして「いつか『小説を信じてやってきて良かったです』と言いたくて」と話しておられた西さん。私も西加奈子を信じてやってきて良かったです、と言いたいぐらい、言えるよう、読み続けていきたいなと思います。

## 西加奈子

1977年 テヘラン生まれ、カイロ・大阪育ち。

2004年『あおい』でデビュー。2007年『通天閣』で織田作之助賞受賞。

2013年『ふくわらい』で第一回河合隼雄物語賞を受賞。

2015年『サラバ!』で第152回直木三十五賞を受賞。